

食卓から見える世界の風景

東海中央病院
坂本 純一



若いころから旅行が好きである。それもあまりポピュラーな場所でないところに行くと、日常から切り離されたような解放感がある。

困るのが食事である。帰国子女のはしりとして約50年近く前に中学2年から高校1年までの3年弱を外国で過ごしたときには、反抗的な私に手を焼いた両親から毎年強制的に1-2ヵ月夏の合宿に送り込まれた。最初に行ったフランスのオーベルニュという山の中では、来る日も来る日も野兎、羊、山羊などの料理に加えて、水のかわりに地ワインがついてくる食事であったが平気だった。次の年に行かされたイギリス西部のデボンシャーでは、昼はSweetbreadという胸腺料理、夜はトーストに煮豆を乗せた同じ食事を6週間ぐらい毎日食べさせられたが、狂牛病がはやる前であったので無事に生還した。

食事に何が出されても大丈夫という自信が揺らいだのは、30歳になる直前にリスボンで行われた学会にかこつけてアフリカのセネガルと象牙海岸に行ったときからである。生野菜、生水に気をつけていたにもかかわらず、お腹をこわしてしまった。なぜポルトガルで行われた学会だったのに西アフリカ諸国にまで足を延ばそうとしたかは今になってはよくわからないが、このときの体調不良は尋常なものではなく、首都ダカールの空港で次のアビジャン行きの飛行機に乗ろうとしても身体が思うように動かず、搭乗口にたどりつくのに大変な思いをしたことを覚えている。

31歳から35歳まで、ニューヨークに留学していたときには、1983年アメリカ東海岸の冬の寒さがあまりにひどかったので、妻と幼子たちを連れて暖かいメキシコに行った。メキシコシティのゾーナ・ロッサという下町に泊まった（半年後の夏に起きた大地震でゾーナ・ロッサの多くの建物は倒壊し地域は壊滅した）。子供が病気になるといけないので、歯磨きのための水までミネラルウォーターを買って予防に努めたが、何故か私だけが絶不調になってしまった。レンタカーでアカプルコに向かう途中の道端で売っていたイグアナの肉を試食した罰があたったためかもしれないが、どうも自分のような上品な(?)人間は低開発国には向いていないのではないかと思うようになった。

不安が確信になったのは40歳前にインドに行ったときである。細心の注意を払っていたにもかかわらず、ニューデリーのさる高級ホテルで夜中に喉が渇いて枕元に置いてあった水を飲んだところ、次の日から3日間強烈な脱水に見舞われた。私はもともと柿を干したような貧相な顔をしているが、その干し柿がさらに乾燥して、ミイラようになってしまった。インド、畏るべしである。ふらふらでタージマハールなどを見物している間、妻は平気で食卓に出された私の分のカレーまで山のように食べ、ついでに現地人しか入って行かない怪しい食堂で、お粥を手ですくって食べながらガイドと談笑して涼しい顔をしていた。

それ以降は、絶対に生野菜は食べないとか、氷の入った飲み物は飲まないとか、注意するようになっ

た。水を注文するときにガス入りのペリエやサンベレグリーノしか飲まなくなったのは、エビアンなどのガスなしの水やジュースの類は低開発国では水で薄めたり何回も詰め替えて供したりすることがわかったからである。大学生になった子供たちが、一緒に行ったバリ島の市場で1人前3円ぐらいの朝食を買って（結構な量がある）がつつ食べるのを横目で見ながらダイエットに励み、今のところはメタボリックにならないで済んでいる。

10年近く前には当時国立がんセンターに勤めていた笹子三津留先生夫妻とガラパゴス諸島を訪ねた。トランジットしたエクアドルの首都キトーには、インカ帝国などの征服者であったスペイン人が建てた大聖堂がある。大聖堂の中にはヨーロッパでよく見かけるものと同じ構図の「最後の晩餐」の絵がある。ミラノのダヴィンチの絵にはパンとワインのほかには魚が皿の上に乗っている図が描かれているが、エクアドルの絵ではその魚に代わって大きなネズミのようなものが描いてある。これはどうもモルモットの一種で、現地人が好物にしている「クエ」というげっ歯類らしい。ある夜、妻と一緒に霧のたちこめるキトーの街に食事に出た。江戸川乱歩の小説に出てくるようなマントをはおった奇怪な顔をしたドアマンのいる古めかしいレストランである。いろいろな肉を揚げたり、焼いたりした料理が出てきたが、どうも舌触り歯触りが特殊な感じの肉があった。熱が加えてあるから大丈夫だろうと思ったので食べてしまったが、これがどうもそのクエだったようである。妻は昼の大聖堂の絵の記憶でアラームが鳴ったようで、その肉は残っていた。メキシコやインドなどでもびくともしなかった低開発国仕様の妻なので、きっと食べたとしてもまったく問題はなかったと思うが、心理的な抵抗はかなり強かったようである。

京都大学から名古屋大学に戻って国策講座を担当することになって、いわゆる開発途上国に行く機会が増えた。中央アジア、東南アジア、バングラデシュ、モンゴルなどの国々である。共通しているのは、やはり食事があまり美味しくない地域が多いことである。例外はタイぐらいだっただろうか。タイの食事の辛さは尋常ではなく、舌がしびれるほどだ



ラオス・パクセ地区の卒業生の家での食事会

が、慣れてくるとこれが実にうまく感じるようになる。唐辛子で殺菌(?)されているせいか、食あたりの頻度も少ないような気がしている。

数年前に行ったラオスでは、首都のビエンチャンから1000kmぐらい南に下りたパクセという町で、講座の卒業生である教え子の家に招かれ、歓待を受けた。料理もなかなかであった。大家族なのでお父さん、お母さんだけでなく、伯父さん伯母さん叔母さん叔父さん、従兄弟、従姉妹、縁戚関係不明の子供たちなどが続々と現れ、ローソクを立てたデコレーションケーキ塔のような形に米飯を盛り付けた料理を中心に食事をした。さらにそこからメコン河が海のように広がって流れているところを、車をいかだのフェリーに乗せて渡り、ワットポーという世界遺産を訪ねた。河や湖に沿って掘立小屋のような食堂があり、ゆで卵を食べた。有精卵の名物料理で、ひよここと卵黄、卵白が一緒にゆでてあり、親子丼を固めたような味がした。またラオスは絹の産地ということで、繭をゆでて絹糸をとった後の蚕の蛹をさらに唐揚げにしたものが出た。これはパリパリとした煎餅のような味でビールとよく合った。腹に蜜をたっぷり蓄えた蟻もたくさん食べた。こうなればやけくそである。ほかにもタガメに似た昆虫も食べた。ただ1つ手が出なかったのは、鈴虫の佃煮で、これはどう見てもゴキブリを連想してしまってダメだった。

あくる年の夏にはキルギスに行った。昼に空港に着いて、大使館員と夕方に食事をしていた。ロシア料理に似ているが騎馬民族を祖先とするだけあって

かなり野趣に富んでいる。カザフスタンで飲んだのとよく似た馬乳酒も、酸味は強いがなかなか美味であった。大使館員の携帯が鳴った。「今電話で、さっきあなたが降りたばかりの首都の空港で旅客機が墜落したと言ってきていますので、日本人が乗っていたかどうか確認してきます」と冷静に言って大使館員は飄然と去って行った。そういえばキルギスではいつかテロがはしりの時代に日本人の技術者が3人ぐらい拉致され人質になって、身代金の支払いのことなどで大変だったと聞いたこともある。変わった国に住んでいると、同じ日本人でもだんだん現地仕様になっていき、イレギュラーな食事にも事件にもほとんど動じなくなるようである。

昨年の冬は誰も希望者がいなかったので、アフガニスタンのカブールに留学生を選別するための面接に出掛けた。日本では最近あまり報道されていないが、アメリカ軍の撤退が決まってから治安はどんどん悪くなってきており、道を歩いている男性の3人に1人はカラシニコフを持っているような物騒な場所である。ホテルが車爆弾で襲撃されて外国人が何人か殺されたということで、防弾車で空港に迎えに来てもらい、大使公邸に泊めてもらった。日本大使館のまわりは高さ5m、厚さ1mのコンクリートの壁で囲まれており、まるで要塞である。大使館員全員はこのコンクリートの要塞の中に建てられた宿舎に住んでいて、誘拐を警戒してほとんど外には出ないし、訪問客も少ない。拘禁症状が出るのを防ぐために大使館付きの医官は一時精神科の医師が務めていた。食事もある館内の食堂で料理された焼きそばや味噌汁、鳥の唐揚げなどの純日本食である。困るのはイスラム教国であるため、アルコールが手に入りにくいことだ。3年前にもカブールに来たことがあったので、今回はトランクにウイスキーを2本詰め、さらに烏賊の塩辛、数の子鮑、蛸山葵などの瓶詰缶詰を山のように持って行き、大変喜ばれた。大使館の中にカラオケルームもあったので一晩中酒盛りとカラオケで盛り上がった。一番日本とかけ離れているはずのアフガニスタンでの食事が一番日本に近いものであった。ただし、大使館に勤務している外交官や他省庁からのアタシェ、駐在武官らは、皆しっかりと「腹の据わった」人物がほとんどで、大概のことではびくともしない人びとであった。私がカブ



宿泊したアフガニスタン・カブールの大使公邸において、security briefingを受けた後、緊急時のフル装備の装着訓練

ールから帰って1-2ヵ月経った後に受け取ったメールでは、堀を越えて武装勢力のロケット砲攻撃を受け、4発大使館内の敷地に着弾したそうである。「窓ガラスが割れたぐらいで、防空壕に入っていたので、何てことはなかった」という、あたかも日常の一部の出来事であるようなコメントがついていた。

どこかに旅に出ることを考えると、忙しい毎日、全天が雲で覆われたような生活の中で、一点だけ小さな細い穴があいてそこだけ円柱形に雲が抜け、雲の向こう側の青空が見えるような気がする。宝石のように散りばめられたウズベキスタンの3つの古都、南の果てまで広がるバタゴニアの荒野やトーレス・デラ・パイネの切り立った山を訪ねること、エジプトのアスワンとルクソールの間をアガサ・クリスティのように船で旅すること、アフリカのサバンナの湿った空気の中で野生動物を真下に見ることができる木の上のロッジに泊まることなど、未だ行ったことがなく、憧れている場所はまだまだ多い。「身体が動ける健康寿命が残っているうちにいろいろなところへ行ってみないか？」と妻を誘っているが、中年を過ぎてからも、異常な強行スケジュールを強いられたことや、怪しい食事に連れまわされたことに警戒心を持ち始めた妻は「これからはOECD加盟国にしか行きません」などと贅沢を言い始めている。低開発国仕様のランドクルーザーのような車や、それに似たタイプの胃腸の丈夫な人間は、文明国でもよいかもしれないが、その存在価値や力が最も評価されるギリギリの場所こそさらに輝くような気もするが、わが家では現在のところ未だこの理論は受け入れられるに至っていない。

Essay